



伊勢半本店
Since 1825

June 2014
Vol.30

ミュージアム 通信

強く、しなやかな 日本の紙—和紙

[企業史コラム3]

もうひとつの化粧史

—伊勢半グループ製品の今昔—

[かわら版]

館藏品・期間限定公開のご案内



「風流職人尽 紙漉」・五雲亭貞秀 画
紙の博物館所蔵
紙漉きを行なう女性

強く、しなやかな日本の紙—和紙

一日であっても欠かせない、重要アイテム「紙」
後漢時代、中国で発明され、完成をみた製紙の技術は、高句麗の僧曇徴を通じて六一〇年に日本にもたらされた。これより約百年ののち、紙の国産化は飛躍的に伸び、奈良時代末期には早くも日本独特の紙の漉き方「流し漉き」の萌芽がみられる。以降、長い年月のなか、雁斐、楮、三桠などの韃皮繊維を原料にした強くしなやかな日本固有の紙—和紙が各地で漉き出されてきた。

文政一〇年(一八二七)、佐藤信淵が著した『経済要録』では、紙について「人世に用ある事、衣服に過ぎて広大なるものなり」と述べ、紙の用途は書写材に留まらず、優れて広いものであることを記している。障子や屏風といった建具、行燈や提灯などの照明具、傘や合羽

のように防水加工を施した雨具、さらに煙草入れ、食器、元結、水引、文箱、張人形、武具など、当時はさまざまな生活用品が紙をもって作られ、使われていた。人々の暮らしは和紙に支えられていたのである。ゆえに同書は、紙を「実に一日も無くては叶わざる要物」だと説いている。

紙の用途拡大は、紙加工の為せる業

紙製品を日常生活の実用品として機能させるには、傘や合羽がよい例だが、耐水性(防水性)、耐久性、防腐蚀性を備えていなければならぬ。このため油(桐油・荏油)や柿渋、漆を塗布し紙を加工する職人が多く存在した。とくに紙の消費量が膨大な都市部では、その加工技術が発展した。また、紙には捻る・絞る・揉むという加工法もある。本来、書写材として用いる場合、紙面は平



筒差し煙草入れ(拡大)

和紙を細く割ぎ、捻り、紙縫り状にして纏んだのち、漆を塗って固めた煙管筒。江戸時代末期・当館所蔵



(全体)

滑であることが要件となることが、紙を布地や皮革などに代用する場合、紙を揉んで柔軟性を付与し、皺紋や凹凸をつけることが行なわれた。紙製のきもの「紙衣」や、皮革になぞらえた紙「擬革紙」、縮緬布の質感を模倣した「ちりめん紙」などがこれにあたる。捻る・絞る・揉むという加工法は、そうした荒い加工操作をしても破れない強靱な紙質を和紙が備えていたからこそ可能な方法だった。

縮まりたる紙、揉みて縮緬のごとく

さて、せっかくなので加工紙「ちりめん紙」について今号では少し詳しくみていくとしよう。

ちりめん紙とはその名のとおり、絹織物の縮緬のような風合いを表現した加工紙のことである。いつ頃から生産されたのか定かでないが、『寛天見聞記』によれば享和の頃(八〇一〜〇四年)、「縮緬紙とてちりまりたる紙に彩色の模様したる美しき紙」を女性たちが手絡として使用していたとある。さらに幕末期

風俗に詳しい『守貞漫稿』によれば、文政の頃(二八一〜二九)、京坂の児童・稚女が「錦絵を揉みて縮緬のごとく」しちりめん錦絵を絆纏や羽織の一部に継ぎ合わせ着用したという。木版印刷した錦絵を絵柄が不自然に歪んだりつぶれた

りしないよう、縦横比を同じ割合で縮め、皺をつけ、縮緬布のような手触りに加工したということである。これらの事例から、一九世紀初頭頃には縮緬加工した紙が存在していただろうと推察できる。

ちりめん紙、その製造法

ちりめん紙は、江戸において本所・深川周辺で多く作られた。ちなみにこのエリアは、明治時代中期頃まで加工紙の業者が多い地であった。

では、どのように紙を縮緬風に仕立てたのか。

まず、紙面に皺をつけるための型紙を作る必要がある。湿らせた和紙を細い平行した溝のある台に乗せ、筋を刻みつける。これに柿渋を塗って固め、乾かすという作業を繰り返す。型紙の完成後、一年間寝かし、枯らす。

こうして作った型紙の上に、①湿らせた原紙を置き、その上に型紙を置

く。交互に置いて積み重ねていく。②①を芯棒(図参照)に巻きつけロール状にし、それを布で巻き、踏みしめて型紙と原紙を密着させる。③揉み台(図参照)に②を固定し、梃子の原理で押し縮める。④圧縮した②を揉み台から外し、布と芯棒を除き、型紙と原紙をはがす。⑤④の原紙の向きを変えて再び型紙の上に置き、②④の作業を繰り返す。

このようにして、原紙の位置を少しずつずらしながら型紙に置き、圧縮を繰り返すと、複雑な皺が出る

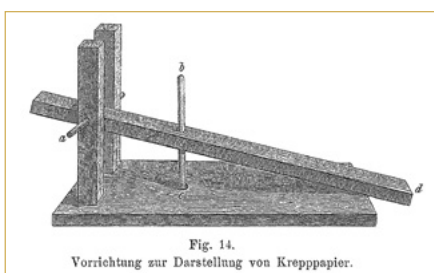


Fig. 14.

Vorrichtung zur Darstellung von Krepppapier.

揉み台図。ちりめん紙の製法を詳しく記したヨハネス・J・ライン著『日本産業誌』(明治19年刊)より

来る。原紙の厚さや、型紙の皺の深さ、圧縮回数、角度を変えて型紙に置く回数などの諸条件によって、ちりめん紙の仕上がりは異なってくる。一般的にちりめん紙加工は原紙の約八〇%の収縮率になるという。

「日本文化の粋を極めたちりめん本」

ちりめん紙は、国内よりも海外で高い評価を得た。明治時代初期、日本を訪れた外国人が土産として持ち帰ったものに、ちりめん本がある。

にちりめん紙仕立ての和装和綴じ本である。多色木版印刷した絵を先の手順で縮緬風に加工した後、文章を活版印刷して綴じたものだ。しかもこれは欧文和本であった。当時日本に在住していた外国人（宣教師や御雇い外国人など）によって、英語をはじめフランス語、ドイツ語など数カ国語に翻訳された、いわば外国人向け絵入り草紙であった。このちりめん本の出版を手掛けた長谷川武次郎（二八五三〜一九三八）は、幼い頃から英語圏の文



英訳ちりめん本『鼠の嫁入り』・明治21年(1888)再版・当館所蔵

化に触れて、語学に堪能であった。明治一八年（二八八五）、長谷川が起した弘文社からちりめん本「日本昔噺シリーズ」の第一弾が発行された。桃太郎・舌切雀・猿蟹合戦・花咲爺・勝々山・鼠の嫁入りの六作品である。



『鼠の嫁入り』より婚礼の場面(一部)

ちりめん本は他社からも出版されたが、長谷川版はその質において一線を画していた。長谷川は上質な原紙を調達し、絵師（右の六作は小林永濯画）、彫師、摺師、ちりめん加工、装丁、欧文活版、すべての工程において優れた職人を組織した。土産

物として国内販売するだけでなく、代理店を通じて輸出や国際共同出版も行なった。長谷川版ちりめん本は、日本の伝統や信仰、文化を欧米に紹介するだけでなく、日本の技術の粋を注いだ工芸品でもあったのだ。

「和紙の日本を活かした」

万延元年（一八六〇）、幕府と修好通商条約を結ぶために来航したオイレンブルク伯率いるプロイセン使節団一行は、その滞日記録のなかで「紙の用途がこの国より広いところはどこにもないであろう」と記している。また同

国の地理学者ヨハネス・J・ラインも、自著『日本産業誌』（明治一九年刊）において、和紙が加工性に富む理由はその強靱さにあることを的確に述べている。いまやすっかり機械漉きされた紙に取って代わ

られ、純正の手漉き和紙は日本人の生活から消えゆく一方である。かつて柳宗悦は、近代化の傍らで和紙の生産者が激しく衰退していく世を憂えて「和紙が日本をいや美しくしているのである。日本に居て和紙を忘れてはすまない」、「和紙の日本を活かしたい」と語った。

明治時代中期、六万八千余戸あったという和紙の生産者が、いまでは数えるほどしかない。日本人であればこそ、手漉きの仕事と和紙の文化を過去にしたくはないものだ。

※1 『日本書紀』推古天皇一八年条。これが文献上では製紙に関する最も古い記述とされている。
※2 紙衣は、手漉きした腰の強い厚手の和紙をこんにやく糊で繋ぎ合せ、柿渋を塗って天日乾燥させたのち、よく足で踏んだり、手で揉んだりして柔らかくしてから衣服に仕立てたもの。
※3 日本髪（髪飾り）の一種。
※4 『東京府志料』明治五年（一八七二）調査参照。
※5 本シリーズはこのちりめん新作を出し続け、全二〇編となる。
※6 「和紙の美」（柳宗悦全集著作篇「第十一巻」）

— 伊勢半グループ製品の

今昔

— 《キスミー眉墨他》

同じメイクアップ化粧品としてカテゴリー分けができるからなのか、大正から昭和初期の口紅・頬紅の製造元は、眉墨も製造しているところが多い。伊勢半も戦前から口紅、頬紅とともに眉墨を製造販売していた。

赤・白・黒で極めた江戸時代の化粧美は、近代に入ると西欧風の化粧品の登場により、色味やメイク法に変化が生じる。近代の伊勢半が製造していた口紅や頬紅、眉墨も

それぞれ口紅・頬紅は各色、眉墨は二色とカラーバリエーションが増える。色の選択肢が増え、コスメが西欧化されていくことによって、日本女性のメイク技術も格段に向上していった。

昭和三年（一九一八）の『東京小間物化粧品商報』三月一〇日号で、美容家山野千枝子が「眉の描き

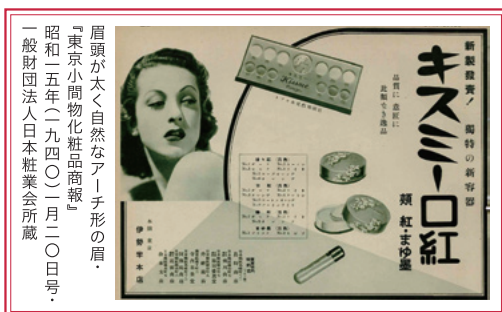
方」について記述している。「眉の薄いといふのは何となくぼやけた、間のぬけた感じを與へるものから、眉の薄いまはりのぼけている様な方は先づ上下からそり上げ、そり下して、一定の形を作り、眉墨は棒のものは濃すぎますから、コルクを焼いて粉にしたもの、或はこれを紙にのしたものをブラシの様な眉ばけにつけて、そくくも毛の上を撫でる様にして描いてまゐります。



昭和一〇年（一九三五）代の伊勢半製眉墨

この時どんなに薄くとも、毛の上だけをたどる様にし、地肌につかない様に気を付けませんと墨がかたまつと醜くなります。（原文ママ）とある。このように眉墨の使い方を、不自然な眉を描かないように、地肌に眉墨をつけないよう勧められている。ちなみに、ここでいう棒状の眉墨、コルクを焼いた粉状の眉墨、紙にのした眉墨、いずれも昭和初期の伊勢半製品に存在する。

昭和一〇年（一九三五）、美容家牛山喜久子は、『小間物化粧品年鑑』の「昭和九年の美容を語る」の中で「眉など一時極端に細くなつたが、自分の眉を尊重し、尚且つそこに苦心して美しく書く」と云うやふな傾向になつた。（原文ママ）と述べている。事実、昭和三年頃の女性の眉は上下からそり落としているためか、一本の棒



眉頭が太く自然なアーチ形の眉。『東京小間物化粧品商報』昭和五年（一九四〇）一月二〇日号。一般財団法人日本粧業会所蔵

の様に細い眉が流行っていた。それが昭和九年以降になると、自分の眉を活かし眉頭を太くする。これこそ今日の神技ともいえる日本女性のメイク技術進歩の第一歩かもしれない。それにしても、よくよく化粧品広告を年代別に見ていると、人は眉によってだいぶ印象が変わるものだと改めて感じさせられる。

かわら版

Information

期間限定公開！
「大正～昭和初期の口紅・頬紅・眉墨」
2014年6月14日（土）～7月13日（日）

紅ミュージアムでは、館蔵品「大正～昭和初期の口紅・頬紅・眉墨」を公開します。先の企業史展でご紹介しきれなかった戦前に伊勢半が製造した口紅・頬紅・眉墨（コラム内の写真参照）を、輸出用品など「キスミー」ブランド以外の当時の伊勢半製品を交えて常設展示とともに展覧します。期間限定の公開資料となりますのでお見逃しなく。

Since 1825
伊勢半本店 紅 ミュージアム

●開館時間／11:00～19:00 ●休館日／毎週月曜日
（月曜日が祝日または振替休日の場合は、翌日が休館日となります）

東京都港区南青山6-6-20 K's南青山ビル1F

TEL&FAX:03-5467-3735

東京メトロ銀座線・千代田線・半蔵門線「表参道」下車B1出口より徒歩12分

<http://www.isehanhonten.co.jp>